

2022年冬(1月)号

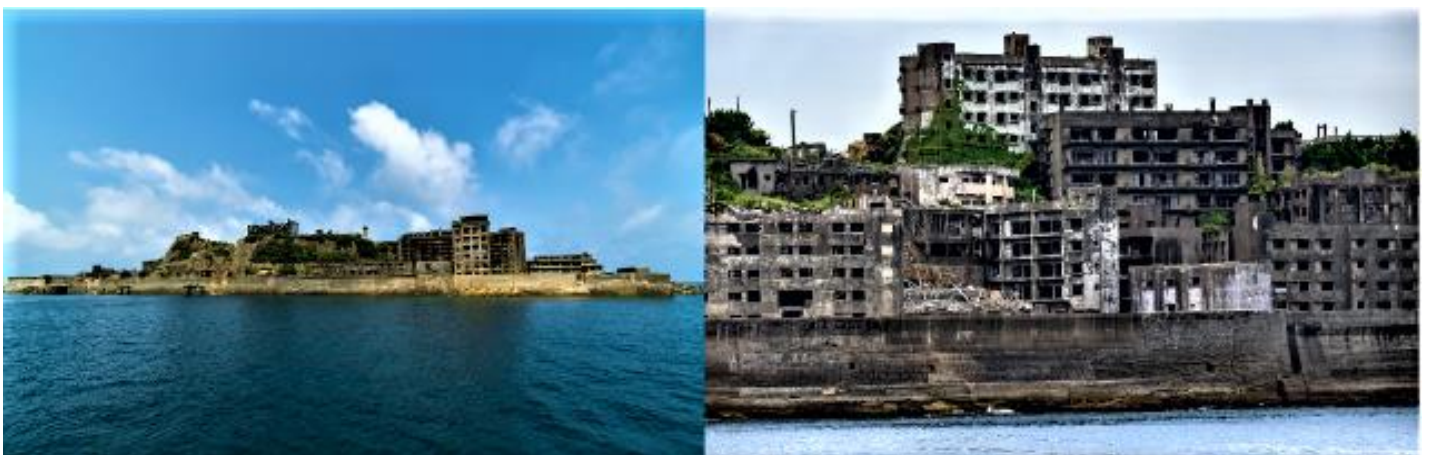
一般社団法人 被曝と健康研究プロジェクト

<http://hibakutokenkou.net/>

今また “軍艦島”を問う

虐待労働のあげく三菱長崎造船所で強制労働
そこで原爆に被爆した朝鮮労働者もいた

田代 真人 ジャーナリスト 3頁～



▲長崎県端島(軍艦島)は、島ごと三菱の炭鉱だった。
三菱マテリアル社 HP から

**本音の
コラム**



ユネスコ世界文化遺産
「明治日本の産業革命遺
産」の内容を紹介する
「産業遺産情報センタ
ー」が十五日公開された。
二〇一五年七月のユネ
スコ世界遺産委員会で登
録が決まった際、日本政
府は「意思に反して連れ
てこられ、厳しい環境の
下で働かされた多くの朝
鮮半島出身者がいたこ
と」を認め「犠牲者を記
憶にとどめるため」情報
センターの設置を約束し
ていた。だが実際には、
朝鮮半島出身者が働かさ
れた軍艦島（端島炭坑）
で、朝鮮人差別は「聞い
たことがない」という元
島民の証言が展示されて
いる。これに対し、韓国
政府は「歴史的事実の歪

お友達の産業遺産

前川 喜平

曲」だと反発。ユネスコ
事務局長に書簡を送り、
世界遺産委員会で日本政
府に約束の履行を求める
文書の採択を求めた。
この案件は、安倍首相
の幼なじみである加藤康
子という人物が熱心に進
めてきた。安倍氏は加藤
氏に「俺がやらせてあげ
る」と約束していたとい
う。二年九月、文化審議
会が答申した「長崎の教
会群とキリスト教関連遺
産」を押しつけ、政治的に
推薦案件に決定。その異
常な経緯は、京都産業大
学を押しつけて加計学園
が獣医学部を新設したの
によく似ている。情報セ
ンターの所長でもある加
藤氏は、軍艦島で「虐待
を受けたという証言はな
かった」と言っただけで
ない。歴史修正主義とい
う点でも、加藤氏と安倍氏
はお友達なのだ。（現代
教育行政研究会代表）

2020.6.28

【明治産業遺産（世界遺産）の「軍艦島」をめぐる問題点の整理】

2015 年日本申請の「軍艦島」を含む「明治日本の産業革命遺産」は「世界遺産」となった。だがしかし。

「軍艦島」遺産登録をめぐる日本政府の約束違反

そもそも、軍艦島を含む「明治日本の産業革命遺産」は、日本政府が「意思に反して連れて来られ、厳しい環境下で働かされた朝鮮半島出身者がいたこと」を認めて「犠牲者を記憶にとどめるため、適切な措置を説明戦略に盛り込む」と宣言し、韓国側も日本政府がそれを「誠実に履行すると信用する」と応じたことによって、ようやく登録が認められたものだ。日本政府が自身の開設した情報センターでこの宣言内容を否定するのは、明白な約束違反であり、韓国側の信頼を裏切る行為だろう。（東京新聞（2018/8/17）



【日本政府 内閣府 HP 文書から】平成、令和は西暦に変換

(4) 産業遺産情報センターの設置

▶設置概要（写真左の建物の主に 1 階部分）

・2017年年のインタープリテーション戦略に基づき産業遺産情報センターが2020年3月31日東京都新宿区に設置され6月15日に一般公開。

▶設置場所等 【総務省統計局別館】 所在地 東京都新宿区若松町19-1
構造 鉄筋コンクリート造 地上4階建て 建築面積 1,081㎡

延べ面積 2,781㎡（うち1階と2階の一部約1,000㎡を活用） ・「明治日本の産業革命遺産」の構成資産は、九州から東北にかけて8県11市にまたがることを踏まえ、全国の情報を集約して発信する拠点として東京都に設置。

【産業遺産情報センター】所長は加藤康子（こうこ）氏。同氏は第3次安倍晋三内閣から第4次第1次まで内閣官房参与（産業遺産の登録および観光振興担当）を務めた。父親は、故安部晋太郎氏の代理と言われた、あの加藤六月氏。世界遺産登録後 5 年たって情報センターを総務省統計局に作って事足りりとする安倍晋三内閣。当の所長は、強制労働などなかったと公言してはばからない人物である。

「読書ノート」

『小説「軍艦島」(原題「カラス」) 上下 ハン・スサン (韓水山) 著を読んで』改

ジャーナリスト・田代真人

2015年7月、「軍艦島」を含む「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が世界遺産に登録された。そのさい、日本政府は、「各サイトの歴史全体について理解できる戦略とすること」との勧告に対し日本政府は「真摯に対応する。より具体的には、日本は、1940年代にいくつかのサイトにおいて、その意思に反して連れて来られ、厳しい環境の下で働かされた多くの朝鮮半島出身者等がいたこと、また、第二次世界大戦中に日本政府としても徴用政策を実施していたことについて理解できるように措置を講じる」、とイコモス勧告に約束した。(外務省 HP)

しかし、6年たってその約束はきちんと果たされず、ユネスコと世界遺産イコモスは、2021年6月来日して調査し報告書を提出、厳しく日本政府を批判し、2022年12月までに回答するよう迫った。今また各方面で問題となっている。

今また「軍艦島」での朝鮮人らへの虐待について考える

収録した私の文章は、11年前、世界遺産登録をめぐって、議論が盛んだったころ、私も編集委員をしていた季刊雑誌「季論21」の2011年4月第12号に「読書ノート」として発表したものである。問題意識は今も変わらない。改変を加えて、敢えていま、掲載することとした。

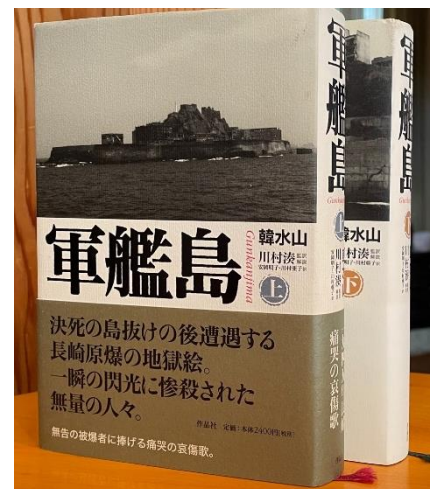
筆者の生まれ故郷である長崎県に、端島(はしま)という島がある。長崎市・港を最奥部とする長崎湾から、湾口部の香焼を通り長崎半島(野母半島)に沿って約20km南下し、半島から約4.5km離れたところにある小さな島だ。南北約480m、東西約160m、周囲1.2km。別名「軍艦島」という。端島には、米軍が魚雷を打ち込んだ跡があるという噂話を、戦後しばらくたってなお、まことしやかに聞かされたものだ。

かつて、作家の高橋治は軍艦島を次のように描いた。「北西季節風で、兎が飛ぶと形容される白い波頭が、見える限りの海面を埋めていた。その只中を、一艘の巨大な船が舳先に高い飛沫を上げて航行しているように見えた。だが、それは船ではなかった。・・・廃坑になり、無人島と化し、今は

動力さえ失った船
そのものの形の島
が、万沙子には死
の象徴のように思
えた」(「別れてのち
の恋歌」新潮文庫)。

その端島は、その軍艦島について、昨今、日本近代化の象徴として「世界遺産に」とか、廃墟ブームに乗った「観光地に」などの声を聞く。しかし、かの地には大きな負の歴史が裏腹となっていることを忘れてはなるまい。地元でさえ、それはあまり語られることはないのだが。

端島での採炭(石炭採掘)は1870(明治3)年頃から本格的に始まり、1883(明治16)年に旧鍋島藩の藩主・鍋島孫六郎が所有し、



近代的な採掘事業に着手。その後、端島のほど近く高島炭砒で炭砒事業を展開していた三菱鋳業が、その支坑として1890(明治23)年、10万円(現在の価値で約20億円)で買収し、以来、1974(昭和49)年の閉山まで84年間三菱炭鋳として事業を続けている。最盛期は島に5300人ものが住んでいたという。その後端島は、2001(平成13)年に三菱マテリアルから長崎県高島町に寄贈。その後2005(平成17)年に長崎市と高島町が合併し、長崎市高島町端島となっている。(三菱マテリアル HP:「HISTORY OF MITSUBISHI」より。)

「ハンデル世代」の韓国人作家の手になる小説『軍艦島』上下(韓国では「カラス」と題して2003年出版)は、2009年末に邦訳が出た。ある種の“ノスタルジー”に埋没することを毅然として許さぬ「慟哭」の著作であった。

小説『軍艦島』は、アジア・太平洋戦争下の日本政府・軍・企業と植民地機構による朝鮮人の強制連行・強制労働、それに重なる長崎原爆被爆を真正面から扱った。歴史認識をも問う、千ページ近い文字通りの大作だ。

軍艦島に閉じ込められた朝鮮人徴用労働者たちの痛憤の悲劇。決死の島抜けの後遭遇する長崎原爆の地獄絵。地獄の海底炭坑に拉致された男たちの苦闘を描く。上巻では、強制連行と強制労働、そして島抜けが、下巻では、長崎原爆の被爆がヤマ場となる。

この作品は、歴史の中で埋没させられよ

うとしている、二つのことを“炙り出した”。

一つは、知られざると言ってもいい「軍艦島」での「悲劇」について。二つには、「悲劇」は、何故どのようにして作られたのか。

実は、筆者が生まれ育った町は、長崎県北部の炭鋳町であった。町の最盛期人口は1万二千人余り、半数以上が炭鋳関係者だった。小学・中学期に、ともに遊び、家に行き来した中には朝鮮人もいたのである。ある時、その友に連れられて行った先は、わが家のすぐ近くだった。全く知らなかった。そこは、床屋とその隣の家との間のひさしに板を渡しただけの粗末な「家」であった。隣家の間との低い石垣で煮炊きをしていた。その親たちが、炭鋳労働者であったかどうか、関心もなく、中学卒業で進路が分かれるまで友と遊んでいた。

『軍艦島』作者の韓水山氏は、日本で邦訳が出た直後に来日し、こう語っている。「長崎で原爆に遭い、苦しみのあまり、『『アイゴー、オモニ(ああっ、お母さん)』と口にしたばかりに『朝鮮人だ』と冷たく放置された若者がいた。植民地政策の結果として被爆した若者たちは祖国が違うという理由で捨てられ、一方(の日本人)は生かされた。そうした歴史を小説を通じて残しておきたかった」

画家の故丸木位里、俊夫妻が長崎原爆を描いた作品「原爆の凶 第十四部 からす」。縦180センチ、横720センチの画面に飛ぶカラスの群れ。倒れた人々を朝鮮の伝統衣装、チマ、チョゴリが覆う。

「1991年に原爆の図・丸木美術館(埼玉県東松山市)でこの絵を見て、衝撃を受けた。小説の原題『カラス』もこの絵にちなんでいる。…私は小説の形で、ただ原爆がよくないというだけでなく、人間の原点とは何なのかを表現しようと思った」



来日の著者・韓氏を扱った当時の「朝日」など

「軍艦島」には、「徴用」の名の下、事実上強制的に朝鮮の若者が集められる様子や日本に着くまでの過酷な扱い、炭坑での劣悪な待遇に加えて、差別的ないじめ、凄惨な暴力、などが生々しく描かれている。

「長崎市の牧師、岡正治さん(故人)がまとめた『原爆と朝鮮人第一集～第六集』をはじめ、日本、韓国双方の資料にあたった。岡さんや、軍艦島で働いた後に原爆に遭い、生き延びた同胞から体験談を聞いた」

市民団体「長崎在日朝鮮人の人権を守る会」が集めた記録には、十四歳で朝鮮半島から徴用された少年のこんな証言が残っているという。「徴用とはいっても(赤紙による)突然の強制だった。掘削場はうつぶせで掘るしかない狭さで(中略)自殺した者や泳いで逃げようとしておぼれ死んだ者など40～50人はいる」。2010年8月2日は、この人徐正雨さん9回目の命日だった。

作品では、朝鮮の徴用工たちが日本人労務係から激しい暴力を受ける。同時に、徴用工たちに同情的な日本人職員や、島から逃げた主人公を助ける老人も登場する。

「暴力をふるう人と受ける人がいたことは、ありのままに書かなければいけない。ただ、単純な反日小説、日本人を告発する小説にはしたくなかった。加害者、被害者とも、いずれも時代の被害者だったのではないか。『もっと日本人を悪く書いた方がよかった』という反応は、韓国の読者からはなかった。韓国社会も変わったと感じた」

韓さんは「軍艦島」執筆のため1988年から約4年間、日本に滞在して取材した。長崎を訪れ、軍艦島にも上陸したという。(東京新聞2009.12.29日付から)

この小説は、「なぜ、朝鮮半島出身者が軍艦島など炭坑で働き、その後、長崎で被爆しなくてはならなかったか。そこには、植民地支配と強制的な動員があった。この作品はそうした歴史的経緯を主人公を通じ、現実味豊かに体感させてくれる」(日韓の女性と歴史を考える会代表・鈴木裕子氏)。

「地獄のような」環境で生きる主人公たちだが、会話には朝鮮半島の諺がふんだんに登場し、巧まざるユーモアがあふれている。

筆者は、鈴木氏の思いに共感する。

「この朝鮮人たちはなんと逞しく、真の意味で人間的なのだろう。李明国、崔又碩、尹知相、そして三菱鉱業所お抱え遊廓の『朝鮮人娼婦』(本来は、『強制売春』を強いられた朝鮮人女性で、いわば『労務慰安婦』ともいえようか)の錦禾ら……。彼女

ら彼らが織り成す物語の興味深い筋立てに読者は惹き込まれ、息を呑む思いで次の場面へと急がされる。どんなに苦難で苛酷な労働環境・生活条件におかれても人間の連帯感や人間的勇気、正義心による抵抗心、そしてなによりもユーモア、諧謔、笑い(監訳者川村湊氏の言葉)を忘れず、権力に立ち向かう彼らの生き方は、感動的であり、いまのわたくしたちには喪失させられているものばかりである。それだけに、ぐっと心に沁み透る。」(「日本図書新聞」2010.3.27、「東京新聞」2009.12.29 から)

この「悲劇」は何故起きたか。

「日韓併合 100 年」を巡る論議が盛んだ。NHK入魂のドラマ「坂の上の雲」が放映されるなか、侵略戦争史をめぐって、あるいは日韓のあれこれの条約をめぐって。だが、論議はやや狭くはないのだろうか。もっと深められなければならない。それを薄める議論が台頭著しい折、先の論議自体もちろん大事なことではあるが。

本誌編集部のある日の論議の中で、もっと全体的な、つまるところ、日本資本主義の発達の中で、「日韓併合」をどう位置づけるか、という視点が欠かせないのではないか、という意見が出た。なるほど、それはもっと深められなければならない、と筆者も思う。

当時はどんな時代だったのだろうか。

「日本帝国主義時代の朝鮮・強制占領時代は、武断政治によって始まり、外聞のいい文化政策期をへて、日中戦争と太平洋戦争の渦がまきおこる中で、いわゆる第三期に入っていた。朝鮮の兵站基地化と戦時動員

という最後の段階である。」

「すでに敗戦の暗雲が濃くたちこめていた一九四二年の七月、朝鮮総督府は朝鮮全域から人的資源と物資を根こそぎ収奪することに全力を傾け、国民義勇隊なるものを作って警備体制を強化すると同時に、これに非協力な朝鮮人に対しては大規模な弾圧と検挙を断行した。さらに『女子挺身勤労令』というものも実施した。十二歳から四十歳までの数十万に達する女性たちを、強制的に朝鮮半島や日本の軍需工場に連行したが、片方では日本軍の慰安婦として多くの女性が南方や中国の前線に連れて行かれ、性の奴隷にさせられている。

徹底して軍国主義の供物させられた朝鮮。暗い桎梏に苦しむ朝鮮では、食料を始めほとんどの物資に対して配給制が実施され、生活は窮乏を極めた。それでも日帝は真鍮の器から松の根に至るまで徴収し続けた。」(「軍艦島」第1章から)

強制連行、強制労働の実態は、どうなっ

朝鮮総督府の統計による人数は、

	日本	(樺太・南洋含)合計
1939 年	49,819	53,120
1940 年	55,979	59,398
1941 年	63,866	67,098
1942 年	111,823	119,851
1943 年	124,286	128,350
1944 年	228,320	228,320
1945 年	不明	不明
合計		656,137

(吉野誠「東アジア史のなかの日本と朝鮮」明石書店 2004 年刊から)

ていたのだろうか。

国民動員計画にもとづき、一九三九年から募集方式でスタート、四二年からは官斡旋方式で、さらに四四年からは徴用方式で実施、大半が炭坑や鉱山、土木工事現場などで、苛酷で強制的な労働に従事させられた。

強制連行先は、朝鮮史研究会編「入門朝鮮の歴史」によると、日本の場合、北は北海道稚内、根室から南は鹿児島指宿まで全国津々浦々339カ所にわたる。なかでも、炭坑を抱えた北海道62カ所、長崎19カ所、北九州24カ所が多い。合計数字は、厚生省労務局は66万7684人、公安調査庁は72万4787人、朝鮮経済統計要覧は111万9032人、と立場によってまちまちであるという。

日本が、このように韓国の支配・領有に執心してきたのは、なぜか。

「一つにはいうまでもなく軍事的要求による。ロシアの南下を阻止し、日本の安全を確保するためには、朝鮮を日本の支配下に置くことが不可欠と考えられた。

だが、もう一つの要因も注目されなければならない。それは経済的な要求である。欧米諸国に比べて、はるかにおくれて発展した日本の資本主義は、海外市場を欧米諸国に抑えられ、地理的には日本に有利な中国市場においてさえ、欧米諸国に対抗することは困難であった。そのような状況のなかで、ようやく手に入れたのが朝鮮市場だったわけである。」(中央公論社版「日本の歴史」22巻 大日本帝国の試練 415頁)

「朝鮮をめぐるロシアとの争い、大治鉄山

をめぐるドイツとの争いも、日本が突入した帝国主義的分割競争の一局面にほかならない。朝鮮・中国に勢力をのぼし利権と領土を得ることは、遼東再奪取を決意していた明治天皇を先頭とする軍人・官僚の要求であるばかりでなく、資本の要求でもあった。」

「…、寄生地主制と結び付き、重い税金と高率小作料と極端な低賃金とを基礎とし、ぼう大な家内工業・工場制手工業群の上に、少数の特権資本家と国家資本の大企業を発展させてきた日本資本主義のもとでは、大衆の商品購買力は異常に低いので、国内市場は相対的につねにきわめてせまかった。

しかも…生産人口の七割が農民で、非農民人口も多かれ少なかれ農民とつながっている当時の日本では、凶作の年は国内市場は急に縮小する。

…日清戦争後では、1897～8年、1900～01年とつづげざまに恐慌がおこり、1930年も深刻な不況におちいった。

従って海外市場の要求は切実強烈となる。その最大の市場として生糸・絹織物の輸出先である欧米諸国と綿糸・綿織物・雑貨などの輸出先である清国・朝鮮があったが、欧米は生糸・絹織物以外に日本の機械制工業の製品輸出市場とはなりえず、現在および将来の日本の資本主義大工業の市場として期待できるのは、清国および朝鮮であった。

…資本力の貧弱な日本は、政治的軍事的進出によって資本の弱さをこれまでも補ってきたが、まして列強帝国主義が勢力範囲と利権の独占をめざして東亜に殺到し

てきたいまや、日本の為政者も資本家も、欧米列強に後れを取るまいとする衝動に、一層激しくかりたてられるのであった。それはときには焦燥とさえなる。閔妃虐殺は、その典型的な表現であった。」(井上清「日本の歴史」岩波新書 67～68 頁)

当時の状況を、韓国ではどのように理解しているのだろうか。

明石書店から邦訳刊行されている、民主化のさなかに編纂された韓国の「国定韓国高等学校国史教科書」第六次教育課程版(1996年初版発行)は、述べている。

「土地の略奪 開港以後、わが国は日帝の資本主義の侵略を克服するために努力した。しかし、わが国は日本の通信・交通施設の占有と拡大、貨幣金融の侵食など経済的浸透を妨げず国権を侵奪された。

国権被奪後、各種産業は日帝の植民地経済体制に改変された。そのなかでも核心的なのは、農業部門で行われたいわゆる土地調査事業で、その目的は全国的な土地略奪にあった。国権強奪以前に、すでにわが国での日本人の土地所有を認める法令を制定していた日帝は、引き続き土地調査令を発表し、莫大な資金と人を動員して、全国的な土地調査事業を行った。そして近代的所有権が認定される土地制度を確立すると宣伝した。

これによって、わが農民は土地所有に必要な書類を具備して定められた期限内に申告する場合のみ所有権を認められた。しかし、当時、土地申告制が農民に広く知られておらず、申告期間が短いのに比べ手続きが複雑なので、申告の機会を逃した人が

多かった。日帝が申告手続きを複雑にしたのは、いうまでもなく韓国人の土地を奪取するための手段であった。また、農民のなかには日帝の施策に協助したくないという民族感情のために申告を故意に忌避し、申告されない土地が多かった。

日帝はこのような未申告地はもちろん、公共機関に属していた土地、村や門中の土地と森林、草原、荒蕪地なども全部朝鮮総督府所有にしてしまった。こうした土地調査事業によって不法に奪取された土地は全国土の約四〇%にもなった。

朝鮮総督府は奪取した土地を登用食卓株式会社をはじめとする日本人の土地会社や個人に安値で払い下げた。突如、土地を略奪された農民は日帝当局にその不当性を抗議したが、日帝当局は正当な事由がないとして無視した。

いわゆる土地調査事業の実施は韓国農民の生活基盤を徹底的に崩した。従来の農民は土地の所有権とともに耕作権も保有していたが、土地調査事業以後、多くの農民は期限付き契約による小作農へと転落してしまった。そうして生活基盤を喪失した農民は日本人の高利貸に苦しめられ、生活維持のために火田民になったり、満州、沿海州、日本などへの移住を余儀なくされた。」

さらに教科書は、「朝鮮総督府はわが農民を没落させる土地調査事業以外にも、林業、漁業、鉱業など産業全般にわたって徹底した搾取政策を行った。」として、「民族企業を規制するために会社令を」「1920年代中盤に入ると日本人の資本投資は軽工業から重工業分野に移り、「林業分野でも

山林令によるリンや調査事業が実施され、莫大な国・公有林と所有主が明確でなかった林野がほとんど日本人の手に移り、林野全体の五〇%以上は朝鮮総督府と日本人に占奪された。「漁業分野で」も、「わが漁場を独占」「漁業令を公布」、「鉱業においても」「わが民族の鉱業活動を制約する鉱業令を制定、公布した後、日本人財閥に多くの鉱山を渡した。」と言う。

食糧について、「日帝は工業化の推進による食糧の不足分をわが国から搾取しようとする、いわゆる産米増殖計画を立て、これをわが農村に強制した。」「九百二十万石を増産するという無理な目標を設定、達成はできなかったが、「米穀収奪だけは目標通り遂行したために、わが国の農村経済を破綻に陥れた。増産量よりはるかに多い量の米穀を収奪したので、わが農民は食糧事情が極度に悪化し、飢餓線上に苦しむようになった。」と述べている。

この点について「入門朝鮮の歴史」(朝鮮史研究会編 三省堂 1992年版)は、「(土地調査)『事業』が、朝鮮農民から土地を奪うことを目的としたものであったか否かが、教科書検定における争点の一つになった。しかし重要なのは、『事業』自体が農民からの土地取り上げを目的とするものであったか否かにあるのではなく、1910年代の総督府農政が農民にとってもった意味を、正確に理解することであろう。本文でのべたような、『事業』における国有地と地主制の擁護、旧来の商業農業の解体といった事態を総合的にみれば、10年代の植民地農政が農民にとっていかに苛酷

なものであったかは、明らかである。」と「解説」している。

『『事業』によっていったん所有者として認められた自作農たちも、1920年に始まる産米増殖計画のなかで、つぎつぎと自分の土地をうしなっていく」。

その「解説」は、「産米増殖計画による貧窮化・土地喪失を生み出す前提には、土地調査事業による土地の完全な私的所有化(これにより土地所有権の自由な移動や、土地を担保に入れることが可能となった)や小作人の土地に対する権利の否定などがあった。」と指摘している。

日本は、日米(桂・タフト)密約、日英同盟、日露講和条約などで欧米帝国主義に韓国支配を認めさせ、1910年韓国を併合した。

こうして、「朝鮮の民族産業の発展は完全に押しとどめられた。1911年に七百四十万円の民族資本は、1917年もほぼ同額しかないが、この間に日本資本は千五十万円から五千九百万円へと、五倍半もになった。その大部分は鉱山業、軍需工業、土地会社、金融会社であった。」「朝鮮の米は日本に持ち去られ、朝鮮内の一人当たり(日本人も含む)の米消費量は1912年の七八升から18年の六〇升に減」っていたのである。(井上清「日本の歴史」)。

産米増殖計画については、早稲田大学の成田龍一氏も岩波新書「シリーズ日本近現代史④」のなかで簡潔ながら指摘している。「品種改良などの技術的対応ではなく、灌漑施設の設置と耕地整理による増産計画であり、朝鮮農民たちは反発を強めた。産

米増殖計画は、大地主を利するものとなったうえ、年間三〇〇～七〇〇万石の米穀が朝鮮から日本に移出された。朝鮮農民は「外米」と「満州粟」を輸入して食し、朝鮮人のコメの消費量は減少している。1920年以降、五〇町歩以上を所有する朝鮮人地主は減少し、一町歩未満の地主とともに、小作農民が増える。この結果、土地を奪われ生活できない朝鮮人が、日本へ渡航する。」(145頁)。

吉野誠氏の研究によると、産米増殖計画の結果もたらされた農民の実情を、慶尚南道蔚山郡達里という農村に見た事例もある。1936年夏当地での社会衛生学的調査による農民の身長統計である。

男子の場合、成年層では達里の農民の方が日本国内の農民の身長を上回っているが、未成年層では逆の関係になっている。達里においては、若い人の体格が劣悪化していることを調査は示す。自給層と貧窮層との身長差から、体格の劣悪化が貧困の結果であることが分かる。青少年の成長を止めるか、悪化させるほど日本による植民地支配が苛酷であったということだ。朝鮮農民にとって生命を保つことさえ危うくするものだった、という吉野氏の指摘は、衝撃的でさえある。

さらに、1935年現在の達里における人

口流失数。戸数と人口は131戸、637人だが、うち出稼ぎ者を出しているのは51戸、108人(日本へ54人、朝鮮内へ53人、満州へ1人)。ほか分家の形で流出した者や一家流出者などを加え、計121人が日本に住んでいた。朝鮮全体でも45年開放の時点で、朝鮮人の海外流出者は約400万人、朝鮮内居住人口の6分の1を占める。世界最大の移民国と言われるインドや中国よりも、全人口に占める海外流出者の比率ははるかに高い。(インドは全人口の1%未満、中国は約2%)。この大量人口流出も、農民の貧窮化をはっきり物語っている、というのである。

ハン・スサン(韓水山) 1946年韓国北東部江原道生まれ。72年に短編小説「四月の終わり」でデビュー、ベストセラー作家に。81年新聞小説で大統領をやゆしたと、当局が連行。88年から92年まで日本滞在。93年に「カラス」(邦訳『軍艦島』)の執筆開始。2003年韓国で出版、2009年末、「作品社」で日本語版出版。上下各2400円(抜き)。

軍艦島 1810年ごろ石炭が発見され、三菱が海底炭坑として操業開始。1974年閉山。島全体が堀で覆われ、従業員用アパートが立つ威容から1920年に三菱長崎造船所で作られた軍艦「土佐」に似ていると、「軍艦島」と呼ばれるようになった。「長崎在日朝鮮人の人権を守る会」によると、45年の終戦当時、島の人口約5300人。うち朝鮮半島出身者約500人、中国人約200人。

「世界遺産」とは、あのアウシュビッツのように、歴史の漆黒部を教訓としてこそ、普遍的意味と価値が生まれ得る。真の歴史認識をふまえてこそその「世界遺産」ではなかろうか。

「軍艦島」の歴史から<強制連行・労働>の事実を消し去ることは出来ないであろう。歴史を隠蔽して、葬り去ろうとする動きを、容認看過することは出来ない。

明治いらい、産業近代化は、侵略戦争と一体で進行したのであった。そのことは、忘れえぬ歴史として、我々の中にある。「軍艦島」は、その日本近代化の縮図であった。

【資料2 証言】

以下の文章は、長崎市の「岡まさはる記念平和資料館」（写真）が所蔵する、『原爆と朝鮮人』第2集から全文引用したものである。強制徴用、強制労働、朝鮮人への差別、など、いわゆる「軍艦島」での実態告発にとどまっていない、徐正雨（ソ・ジョンウ）氏の叫びを、汲んで頂きたいと思う。同資料館は、長崎県内における朝鮮人強制連行の実相を示し、端島へ連行された徐正雨さんの生涯を展示している。『原爆と朝鮮人』第1～第7集（「長崎在日朝鮮人の人権を守る会」発行）等の資料も販売している。

長崎駅ほど近くの「岡まさはる記念長崎平和資料館」 tel/fax095-820-5600

<https://www.okakinen.jp/> mail:tomoneko@ngs1.cncm.ne.jp

徐正雨氏の証言

14歳で“地獄の島”に連行され、そのうえ長崎で原爆に

徐正雨（ソ・ジョンウ） 五四 男（*2001年8月2日、逝去）
1928（昭和3）年10月2日生 長崎市緑が丘町二二〇番地
証言日 1983年7月3日および同7月9日（端島にて）

私は慶尚南道宜寧郡宜寧面の小農の家に長男として生まれましたが、昭和七、八年頃、父母が私を残して名古屋へ渡日したため、祖父に養育されました。祖父は学のある人で、家庭教師のように私に勉強を教えてくれました。財産はあったのですが、伯父、つまり父の兄が浪費して食いつぶし、祖父は私が七、八歳のとき、失意のうちに世を去りました。しかし私のことは自分の弟に面倒を託していましたので、祖父の死後、私はそこに預けられ、下働きの毎日を送りました。山に薪を取りに行ったり、朝、牛をつれて家を出ますと、昼ごはんは食わずに夕方帰ってくるような毎日でした。牛の草とりも、十歳にもならない私にはつらい仕事でした。米は供出、供出で、日朝結託の警察の目は厳重で、おいしいことで有名なあの朝鮮米はみな供出させられて、自分たちは麦やソバ粉ばかり食べていました。飛行機の油にするとかで、松脂も取られました。ノルマがあるので、松の木を掘って懸命に取りました。

おじさん（祖父の弟）は体が弱く、仕事が十分にできないので、私の成長につれて、私を頼りにしてくれました。私が一七歳になったら結婚させると言っていました。ところが忘れもしません、一四歳のときです。面（村）役場から徴用の赤紙がきて、私は日本に連行されてきたのです。徴用といっても、突然の強制であり、手当たり次第の強制連行と同じです。お分かりでしょう、一四歳といえば、今の中学二年生ですよ。おじさんは、仕事手がなくなるので強く反対しましたが、相手は問答無用でした。私の村からは二名でしたが、強制的にトラックに乗せられ、市役所に着くと、一四、五歳から二〇歳ぐらいの青年が何干人も集められていました。旅館に一泊し、翌朝、トラックを何台も何台も連ねて、長崎から諫早ぐらいの距離を行き、そこからは汽車で釜山へ運ばれ、連絡船で下関に着きました。そして夜行列車で長崎へは到着しましたが、ここに連れて来られたのは三〇〇人ほどで、その全員が大波止から終着地の端島へと送られたのです。

私は名古屋に父母だけでなく、佐世保にも親戚がありましたので、日本のどこかに行かされても、機



会をみて逃亡するつもりでした。けれども端島に着くや、すっかり希望を失いました。ごらんのとおり、島は高いコンクリートの絶壁に囲まれています。見えるものは海、海ばかりです。こんな小さな島に、九階建ての高層ビルがひしめいています。駕きました。ここは坑口とは反対側の島の端っこですが、これらの高層アパートは当時からありました。私たち朝鮮人は、この角の、隅の二階建てと四階建ての建物に入れられました。一人一畳にも満たない狭い部屋に七、八人いっしょでした。外見はモルタルや鉄筋ですが、中はボロボロでした。私が入られたのは、ここです。この室番B一〇二とあるこの部屋です。今、見ると戦後、炭坑の診療所の病室になったんでしょうねえ。それも今は廃墟で…。私たちは糠米袋のような服を与えられて、到着の翌日から働かされました。日本刀をさげた者や、さげない者があれこれ命令しました。

この海の下が炭坑です。エレベーターで堅坑を地中深く降り、下は石炭がどんどん運ばれて広いものですが、掘さく場となると、うつぶせで掘るしかない狭さで、暑くて、苦しくて、疲労のあまり眠くなり、ガスもたまりますし、それに一方では落盤の危険もあるしで、このままでは生きて帰れないと思いました。落盤で月に四、五人は死んでいたでしょう。今のような、安全を考えた炭坑では全然ないですよ。死人は端島のそばの中ノ島で焼かれました。今も、そのときのカマがあるはずです。こんな重労働に、食事は豆カス八〇%、玄米二〇%のめしと、鰯を丸だきにして潰したものがおかずで、私は毎日のように下痢して、激しく衰弱しました。それでも仕事を休もうものなら、監督が来て、ほら、そこの診療所が当時は管理事務所でしたから、そこへ連れて行って、リンチを受けました。どんなにきつくても「はい、働きに行きます」と言うまで殴られました。「勝手はデキン」と何度聞かされたことでしょうか。端島の道はこの一本道だけです。この一本道を毎日通いながら、堤防の上から遠く朝鮮の方を見て、何度海に飛び込んで死のうと思ったか知れません。どうですか、この白く砕ける波、あそこと少しも違いません。仲間のうち自殺した者や、高浜へ泳いで逃げようとして溺れ死んだ者など、四、五人はいます。私は泳げません。しかし、何か運があったんでしょうね。五カ月後に、私は長崎市にある三菱の幸町寮に移動を命じられ、島を脱出することになりました。あのまま残っていたら、本当に生きてはいないと思います。島にいた同胞の数は、私たちより先に二〇〇人ばかりいましたから、合計で五、六〇〇人だったでしょう。上下各五室の二階屋一棟と、各階五、六室の四階建て四棟に詰め込まれていました。あの同胞たちのことを思うと、いつまでも胸がしめつけられる思いがします。軍艦島なんていっていますが、私に言わせれば、絶対に逃げられない監獄島です。

陸の長崎に来た私は、今度こそ逃げられると思い、嬉しくてたまりませんでした。仕事はカシメを打つ重労働でしたが、食事は端島とは段違いで、白米に馬肉、鯨肉も出ました。しかし、朝七時半ごろ、一列に並ばせられて幸町寮から造船所に向かう途中は、前後左右に憲兵がつき、列をはみ出す者は容赦なく蹴りますし、塀に囲まれた寮内は監視がぐるぐる回り、とても逃げられる状態ではありませんでした。その点を除けば、隣のレンガ造りの寮には外国人捕虜がいて、言葉が通じないので話はしませんが、何となく気持の通じるものがあり、また仲間も大体同じ歳ごろで、手づくりの花札をやったり、風呂場で暴れあつたりで楽しいこともありました。風呂場当番、食事当番を決めて助け合いました。今もよく思い出します。けれども、カシメ打ちは本当にきつい仕事です。冬は何とかなりますが、夏は火を使うので耐えきれない労働です。仲間の中にはとうとう食欲がなくなり、衰弱し、栄養失調で竹の久保病院へ入院した者や、そこで死亡した者も数多くいます。そうですね、八十人くらいは入院したでしょう。職場では休み時間には丘の上で体操をするのですが、NHKの体操みたいなもので、この仕方が悪いとまた殴る、蹴るのリンチを受けました。仕事はきついし、若いときです

から眠い一心でしたが、次第に空襲が激しくなり、焼夷弾、サイレンと、そのたびに防空壕に出たり入ったりで、ただでさえ眠いときに叩き起こされて、腹が立ちました。逃げよう、逃げようと思いつつ果たせないうちに、とうとう八・九を迎えました。父は四九歳で亡くなりましたが、当時、一度だけ寮を訪ねてくれ、そのとき、もし逃げられたらまず佐世保の親戚に行き、そこから名古屋へ来るように話し合ったことがあります。

あの日、八月九日、私は運よく出勤の日で、飽の浦の造船所で被爆しましたが、もし交代で寮内にいたら当然爆死しています。三〇〇人のうち一〇〇人は交代で休んでいたのです。B29の大きい飛行機が飛んできて、ピカッと光ったかと思うと、ものすごい爆音がしました。私は足の親指に鉄板が舞い落ちて怪我をしました。後に手術をして、今も傷痕があります。ガラスが割れ、バラックは崩れ、あちこちに火の手と煙が上がりました。残ったのはしっかりした家だけです。私たちは強制連行者が入られていた木鉢寮へ行くように言われ、そこで三、四日滞在しました。それから、大橋、住吉方面の道路整理を命じられ、見るも無惨な死体や瓦れきの整理に当たりました。よく見ないと、犬か、豚か、馬か分からない有様でした。煙がくすぶり、人や動物の死体の臭いでいっぱいでした。焼けた電車の中に、丸焼けの死体がころがっていました。

八月一五日、天皇の放送があって、私たちはやっと自由になりました。仲間はどんどん船で帰国して行きました。私も南さんという飯場頭をしていた人から誘われましたが、すでにおじさんは死亡していましたし、両親は名古屋ですので、断りました。橋の下で寝たり、三、四日食事なしのときもありましたが、そのうちに、土木工場の飯場を持っていた安田さんという同胞の下で働くことになりましたが、彼も二年前に帰国して今は日本にいません。安田さんの奥さんは日本人でした。昭和二二、三年ごろは、浜の町にあったヤミ市で、日本人の持ってきたものを売ったりして生活を立てました。あの当時は、身よりのない復員兵がウロウロして、ルンペンさながらでした。飛行服や軍靴もよく売りに出されました。その後、屋台を一台持ち、元手を作って小倉に行き、背広屋を開店するほどになりましたが、雇った日本人の店員にだまされて無一文になり、再び長崎に戻り、網場の榊本さん、本名は朴か李というと思いますが、彼の世話になりました。

私が今のような体になったのは、炭坑、造船所での強制労働、そして、原爆を受けたからですが、榊本さんのところを出て、また本河内の安田さんの家にいたとき、咳とともに洗面器半分ぐらいの多量の血を吐きました。これが最初の咯血です。私は十分苦勞してきましたし、特にあの端島での日々を思えば、少々のは我慢できる人間です。けれども、咯血ほど苦しいものはありません。安田さんの奥さんが病院へと言うので、いやだと断ると、子供にうつるから出ていってくれと言われ、仕方なしに今の親和銀行本店のところにあった保健所に行きますと、直ちに入院ということで、町田病院に移されました。これが入退院のくり返しの始まりです。安田さんの奥さんは、薄い布団の上下を用意してくれましたし、タバコを買ってきてくれたり、子供を背負って面会に来てくれたりで、物のない時分だけに、今もその親切は忘れられません。咯血は半年で止まりました。そのとき一緒に入院していた人はみんな死にました。私は生活保護を受け、米一升一五円の時代に、月一、二円では足りず、地金商やバーを営んでいた同胞に無心して、福祉事務所から派遣された付添いのおばさんに渡していました。今なら生活保護で最低生活はできますが、当時は無理でした。

あれから三一年間、私はついに健康な体に回復することができず、大村、愛宕、東望、住吉、小江原と、療養所を転々とし、一三年前、朝起きると枕もとに雪がたまっているような隙間だらけの療養所を逐電して、以後今日まで通院生活を続けています。あの最後の逃亡は、毛布一枚の寒さの上に、散歩好きの私に外出も許さない不自由さから、やむを得ず決行したものです。どうせ入退院の明け暮れ

と諦めていましたが、病院で日本人患者から差別され、いじめられるのには耐えられませんでした。私も負けてはいませんから「朝鮮人が寝言を言う」などと言われると、それだけ余計だと言って抗議し、時には殴られる、殴るといったこともありました。病院の先生がとめに入って、徐さんは優しく真面目だし、と日本人に注意すると、「朝鮮人の肩を持つ」と言って先生にくっついてかかる始末でした。また一年も寝ていると、運動不足から胃潰瘍になって、やせこけたこともあります。昔から歩くことの好きな私には、外出禁止の長い入院生活はひどくこたえました。退院して四畳半一室の間借りで栄養も取れない生活をしていると、また悪くなります。今は通院ですが、「息切れがする」と言うと、医者は「あんたの肺なら仕方ない。無理せず、調整して生きなさい」と言うだけです。先生にしてもこう言うしかないのかも知れませんが。朝鮮人被爆者の記録映画「世界の人へ」を作った盛善吉監督と一緒に診療所へ行ったとき、医者が私の肺のレントゲン写真を見ながら、「肺がない」と言うたびに、盛先生が二回も三回も振り向いてはじっと私の顔を覗き込んだのを覚えています。

一七歳になったら結婚させると言っていたおじさんの言葉を思い出しながらも、私はもう結婚のことはあきらめていました。しかし、八年前、病院で知り合った日本人女性と結婚して、子供もできました。いまやっと小学一年生の双子です。結婚と申しましたが、実は戸籍上の結婚はしていないのです。子供たちは私を「お父ちゃん、お父ちゃん」と言って慕ってくれますが、籍は女房の籍にしているのです。理由はお分かりでしょう。学校に行けば、「朝鮮人の子」といじめられるに決まっています。二世、三世にはナマリはありませんが、私のように一四歳まで朝鮮で育った者は、どうしてもナマリが抜けません。直ぐ朝鮮人だと分かって、家を借りるのにも大変苦勞してきました。学校でいじめられて自殺した子供もいるではありませんか。強くなれ、いじめ返せ、と私は言っています。そればかり言っています。日本人の中には理解のある人もいることは知っていますが、正直に言って、普通の日本人はものすごく悪いですよ。これは本当です。私はいつも言い返しますが、こんな馬鹿と話してもいっしょと思ってあきらめたことがあります。革新党だから差別しないということはありません。

「朝鮮人は本国へ帰ればよかるとに。日本いれば大迷惑」と言った日本人をかばって、私を暴力的に威圧した革新議員だっています。苦い、苦い体験です。私は好きで日本に来たものではありません。あと三カ月で五五歳にもなりますが、子供は小学一年生、結婚もできない、病気はなおらないと宣言され、結核ということで保健所がうるさく言って、子供は施設に預けている有様です。せめて近くの施設で、よく面会に行けるところならいいのですが、中央児童相談所に相談しても、双子だからダメと理屈にならないことを言って、遠くの施設から近くの施設へ移してくれません。私にとっては「お父ちゃんが会いに来て」という子供の言葉だけが救いです。

差別についても沢山話しましたが、こんなことはみんな日本政府の責任だと思うのです。朝鮮を植民地にして、われわれを強制連行した。その上原爆にまで遭わせた過去を反省しないどころか、そのことをよく知っている政府が、行政が、なぜ先頭に立って日本人に知らせ、差別をなくすように努力しないのか。近くの朝鮮人に親切にするように言わないのか。私は抗議したい気持ちでいっぱいです。何もしてくれなくてよい、ただ差別だけはやめてくれと叫びたいのです。関東大震災のときの悪質なデマと朝鮮人虐殺だって、どれだけ反省されていますか。

日本は世界第二位の経済力とか言っていますが、戦後はあれほど貧しかったではありませんか。まがりなりにも平和だったからこそ栄えたと思うのです。戦争になれば、一部の者はもうかって、すべてが終わりです。スーパーに行ってみませんか。何でもあるでしょ。昔はサツマイモばかり。ヌカ、メリケン粉ばかり。私は健康を害してはいても、差別のない社会、平和な社会のために、死ぬまで運動したいと思っています。

(「原爆と朝鮮人」第二集、六九～七七頁)

【資料3 韓国の反応】

明治産業遺産巡る約束不履行 日本に「強い遺憾」=ユネスコ 2021.07.12 20:06

【ソウル聯合ニュース】国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」に含まれている長崎市の端島炭坑（軍艦島）であった朝鮮半島出身者の強制労働を巡り、その歴史を紹介するとした日本政府の約束が履行されていないことが、ユネスコなど国際機関の調査で再確認された。

韓国外交部は12日、ユネスコとその諮問機関である国際記念物遺跡会議（イコモス）の共同調査団が先月7～9日に東京の産業遺産情報センターを視察した内容に関する報告書が同日午後世界遺産センターのホームページに掲載されたと明らかにした。

日本が昨年6月に東京に開所した産業遺産情報センターには軍艦島などの資料が展示されているが、共同調査団がこの施設を視察した結果、強制労働の歴史を正確に伝えるよう求める世界遺産委員会の勧告が履行されていないことが明らかになった。

全60ページからなる調査団の報告書は、1910年以降の「歴史全体（full history）」に対する日本の説明戦略が不十分だと結論付けた。「歴史全体」とは、軍艦島など明治時代の産業遺産を日本人の観点からだけでなく朝鮮半島出身の強制徴用労働者など被害者の視点からも均等に扱うことを意味する。

報告書は特に、1940年代に韓国人などが本人の意志に反して強制労働をさせられたことが理解できるようにする日本の措置が不十分だと指摘した。

また、報告書はセンターの場所が産業遺産から遠く離れているのに加え、強制労働の犠牲者を悼むために適した展示がないなど、犠牲者を追悼するための適切な措置を取らなかったと指摘。類似した歴史を持つドイツなど世界の模範事例と比べて不十分であり、韓国など当事国との持続的な対話が必要だとした。

報告書と併せて、第44回世界遺産委員会に提出される「日本近代産業施設決定文案」も世界遺産センターのホームページに掲載された。今回の決定文案には、日本が2018年6月に世界遺産委員会で採択された決定を十分に履行していないことに対する「強い遺憾」（strongly regrets）という表現が盛り込まれた。

外交部の当局者は「国際機関の文案に『強い遺憾』という表現が入るのは極めて異例だ」とした。決定文案には、日本に対し強制労働があった事実や日本政府の徴用政策が分かるような措置を取るよう日本側に促す内容も含まれている。決定文案は、日本に対して約束の履行を要請するとともに、来年12月1日までに補完した報告書を提出するよう勧告している。

【お知らせ】

編集スタッフの高齢化、財政事情等により、2022年から「ヒバクと健康 LETTER」誌を随時発行とさせていただきます。発行は年4回程度にし、<http://hibakutokenkou.net/>のホームページの充実を図ります。

コロナが安定的に終息へ向えば、「子ども甲状腺検診」を再開し、ホームページでお知らせします。また、レターで発表した論文は、2021年までのものは22年早期に、22年発表のものは出来るだけ早く、ホームページに掲載発表し無料で読むことが出来るようにします。1回の「レター」発行経費約4万円を節約し、ホームページと一体で運用します。

「購読料」は廃止し、「振替伝票」は、自由意思でご寄付に使用していただきたいと思えます。できれば、これまでに勝るご支援を頂けますよう、一同更に精進を重ねたいと決意しております。よろしくお願いいたします。

一般社団法人「被曝と健康研究プロジェクト」役員

顧問 有馬理恵 劇団俳優座女優

石塚 健 医師

沢田昭二 名古屋大学名誉教授、内部被曝研究者

曾根のぶひと 九州工業大学名誉教授

玉田文子 医師

西尾正道 北海道がんセンター名誉院長

本行忠志 大阪大学医学系研究科教授

益川敏英 ノーベル物理学賞受賞（2021年7月ご逝去）

松崎道幸 北海道旭川北医院院長

矢ヶ崎克馬 琉球大学名誉教授

代表理事 田代真人 ジャーナリスト

理事 浅野真理、住田ふじえ

監事 三宅 敏文

「LETTER」の内容についてのご意見は下記へお寄せください。

一般社団法人 被曝と健康研究プロジェクト 代表 田代真人

〒325-0302 栃木県那須町高久丙4 0 7 - 9 9 7

Eメール：masa03to@gmail.com